

中学校

2024年度 学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

報告者 (校長 林 武宏)

I 自己評価

1. 本校の教育目標

「校訓」知性・根気・友愛

2. 本年度の重点目標

- 1) 探究型の学びのブラッシュアップ
- 2) 実りある「対話」を通じた合意形成
- 3) (自閉症児) 伝える力をつける

3. 重点目標についての評価(A~D)と取り組み状況や課題

A…達成できた B…概ね達成できた C…達成が不十分 D…達成できていない

1) 探究型の学びのブラッシュアップ(A)

『教科横断型授業(通称コラボ授業)』は今年度6年目となり、全9教科のカリキュラムに組み込まれ、生徒の学びの深化につながっている。教科や分野といった枠にこだわらずに問題解決を目指していく思考体験は、将来、実社会における問題発見・解決の土台となる。カリキュラム化されたものについては実施の度に見直されるとともに、新たな題材開発も継続されている。「探究科」(1、2年生)については、今年度は本校オリジナルの教員用指導書としてサブノートを活用し、生徒指導にあたった。授業の成果としての、学園祭でのプレゼンテーション(1年生ゼミ、2年生個人探究)は充実し、保護者からの評価も高い。探究成果物について、外部コンテストの入賞も学校および個人で今年度もあり、客観的な評価も高い。

2) 実りある「対話」を通じた合意形成(B)

HRや委員会活動の話し合いの場において、一部の生徒の意見や、リーダーからのトップダウンで結論づけず、多くの生徒の考えに触れ、総意としての結論に至ることが増えた。また話し合いが難しい場面においては、指導者からの助言を行うことで軌道修正することができた。また、教科指導においても、例えば「国語科」では、読解活動を進める上で、象徴表現の読み取りについて情報共有し、意見交換を行うことで根拠をもって自分なりの解釈へと昇華させることができた。また「理科」の実験の仮説や考察についてはグループでの対話を通して、表現の工夫やより深い考察につなげることができた。

その他、「生命科」をはじめ、さまざまな教科で意識的に対話の機会を増やし、受け身になることなく、アクティブラーニングを行うことができた。こうした学校生活全体での『対話』の重視は、相互理解、そして他者の尊重につながり、すべての生徒にとってのウェルビーイングの向上に生かされた。一方で、集団が大きくなればなるほど、対話により合意形成を目指す難しさを生徒自身が感じることもあり、また、反対に個人間のレベルでは感情や個人の考えに固執する様子も散見されたため、『対話』による合意形成は次年度も継続して重点的目標としていきたい。

3) (自閉症児)伝える力をする(A)

社会性を育てる手段として、コミュニケーション力の強化は欠かせない。そこで、昨年度から2年間継続して「伝える力をつける」という重点を掲げて、「伝える」相手として、対友達、対先生、対家族など様々な場面を設定するとともに、その手段も言葉に限らずノートやメモを渡す、あるいは表情やジェスチャーなどにより発信していくなど、実践の機会を増やしてきた。将来社会で必要とされる「報・連・相」の土台を形成することにおいて一定以上の成長が見られた。今年度はさらに「聞き取る力の向上」にも取り組んだ。基本の「聞く姿勢(手を止め、視線を向けて聞く)」を日常的に意識することを土台にして、聞き取った内容を「確認する」という機会を多く設けた。例えば、連絡帳に書く内容を黒板に書くのではなく口頭で伝え、聞き取って書かせる。あるいは、朝のホームルームでクラス全体に伝えた内容を、個別に復唱させ、さらに、それを説明させる。授業で指示した手順について、ポイントを確認する。その後実際に行動できているかを確かめる。ご家庭とも協力し、連絡帳を見ながら次の日のことを家で説明する。担任からの伝言メモを取り(受け取り)、家庭でそのメモを見て伝言する(メモを渡す)。連絡帳で伝えることは最低限にとどめ、プラスαを家庭で伝えることを意識させる等々。また、伝える・聞き取る、という活動には各自のワーキングメモリが大きく関わるため、授業でもワーキングメモリの働きを高めるための活動を実践した。伝言や神経衰弱などの記憶力ゲーム、間違い探し、クイズ、○○当てゲームなど。「聞き取る力の向上」によって、その相互作用としての「伝える力」に大きな成果が見られた。

4. 総合的な評価と今後の課題

今年度はすべての行事や校外学習をポストコロナの新しい形で実施することができた。来校対象や人数などにコロナによる制限を設けることなく、生徒にとっても貴重な実地の経験を積むことができた。特に校外学習については、3年生が修学学習として京都奈良学習を実施するとともに、2年生も時期をずらして京都奈良学習を行うことで、コロナによる校外学習計画の見直しについて、ようやく移行措置を終了できた。次年度より修学学習は長崎・福岡県での旅程で準備を進めている。今年度はさらに、希望者対象の海外語学研修をフィリピンのセブ島にて夏季休暇に実施。自閉症児クラス生徒も親子での参加も可として、全校で25名の参加があった。今後も継続実施を予定している。

外部からの評価として、『探究科』の2年生の個人作品を応募している「全国学芸・サイエンスコンクール」(主催:旺文社)では個人で1名が入選し、6年連続の上位入賞となった。また、同コンクールにおいて各部門につき全国で1校のみが選ばれる学校賞も社会科自由研究部門で受賞した(『フジテレビ学校特別奨励賞』)。また、「毎日カップ 中学校体力つくりコンテスト」(主催:毎日新聞社)では今年度は全国3827校がエントリーする中、全国で2位にあたる『毎日新聞社賞』を受賞した。さらに重点強化としている英語では、全員が英語検定を受検しており、3年生の61%が準2級(高校中級程度)以上を取得した。

II 学校関係者評価

- 1) 今年度は、新型コロナウイルスの影響が一切なく、通常通りの学校生活を送ることができた。特にスポーツ大会や学園祭は、例年通り大いに盛り上がり、生徒たちにとって親睦を深める貴重な機会となったと感じている。
- 2) 知・徳・体、バランスの取れたカリキュラムが編成されている。本質的な学びを重視しつつも、健常児は全員が高校受験に臨むため、充実した校内指導が行われている。行事もスポーツ大会や発表会など、インクルーシブ教育という観点でもよく考えられたプログラムとなっており、心が豊かに成長できた。
- 3) 受験期を経験し、進学クラスの編成が各自の進学目標に最短距離でアプローチできる仕組みであることを実感した。一方で、学年全体として受験に向かう雰囲気が十分に醸成されているかという点では、クラスごとの温度差があることも否めず、個別の問題のように感じる場面もあった。受験を「学年全体のチーム戦」として捉え、互いに高め合える環境がさらに整うと、より良い学習環境につながるのではないかと思う。
- 4) オリジナルの自主学習プランノートを使用して、個人の家庭学習を生徒自身が立案・実行できる手立てが指導され、効果を上げている。教科の学習の伸長につながるという目的と同時に、毎日のコメントのやりとりを通して、担任の先生とのコミュニケーションのツールになっている。